

パリ通信第128号

アリスティッド・マイヨル展

8月のパリはがらんとしている。

2019年コロナ禍から3年振りのバカンス、だれにとっても待ちに待った夏休み。ウクライナ戦争に起因するインフレで節約旅行を強いられるが、フランス国内どこもバカンス客で一杯だ。中国、日本、韓国などアジア人はまだ少ないが、アメリカ人観光客がパリに戻り経済活性化に貢献している。時々食べに行くモンパルナスのとんかつ屋さんも8月は休み。家に近い日本食スーパーも8月末まで休業。

パリは今夏記録的な猛暑で、昼間は外を歩けない日もある。年度末の土木工事だけがパリ市内あちらこちらで行われ、暑い中アスファルトを掘り返している。家の真下の道路も朝から大型ハンマーでがらがん地響きする程の騒音で頭が痛くなり、涼しい静かなところへ避難せざるを得ない。そのような訳で間もなく終わる「アリスティッド・マイヨル展」(オルセー美術館)(2022年4月12日～8月21日)を見に行くことにした。平日の午前中で人も少なくゆっくりと見ることができた。

オーギュスト・ロダン(1840-1917)とともにフランス印象派以後の彫刻を代表するアリスティッド・マイヨル(1861-1944)はペルピニャンからさらに南、スペインとの国境近くの港町バニュリュス・シュル・メールに生まれる。画家を志し1885年パリ・ボザールに席を置き、1888年からサロンに出展する。ゴーギャンとの出会いが画家としてのマイヨルに影響し、ポール・ボナール、エドワール・ビュイヤール、モーリス・ドゥニなど「ナビ派」の画家に共通する平らで単純化された装飾的な作品を描いた。

1892年「日傘の女性」(190,50 x 149,60 cm オルセー美術館所蔵)はその最たる例である。1890年代は絵画の他、刺繍、タペストリー、陶器、木彫りなどの形態を模索する。そして1896年クロチルド・ナルシスとの結婚を機に、裸婦の彫刻家マイヨルへの道が開かれる。





「地中海」(1905年石膏、1923-1927年大理石、高さ110,40cm、幅117,50cm、奥行き68,50cm)、「夜」(1908-1912年、ロレーヌ石灰岩、高さ104cm、幅77,50cm、奥行き108cm)の大作が生まれ、以後、地中海の女性を象徴するふくよかで、逞しく、力強くも軽やかで、調和のとれた大きな裸婦の女性像が次々に出て来るのである。

「三つの影」に代表されるようにロダンの彫刻は男性の美、ミケランジェロに匹敵する力強い筋肉の躍動であるのに対して、マイヨルの彫刻は優しさと力強さ、柔らかな曲線、滑らかで純化された表面、前を向いた若い女性の美しさである。従って、真っ白で冷たく切れる

ようなイタリアの大理石よりもピレネー山脈産のピンクがかった大理石を、銅よりも鉛を好んでいる。

今回の展覧会では「セザンヌに捧げるモニュメント」(1912-1925年)と「空気」(1938年)が隣り合わせで展示されている。ともに国の注文であり、作曲家クロード・ドビュッシーへのモニュメントもある。

「空気」はパリ・チュイルリー公園に鉛像としても置かれている。「空気」のモデルとなり、今日のマイヨル美術館を始め、マイヨルの裸婦像がパリ日常に受け継がれて

いるのはダイナ・ヴィエルニー(1919-2009)のお陰である。1919年当時ルーマニア(現在モルダヴィア)に生まれ、15歳の時からマイヨルのミューズとしてモデルを勤め、1944年マイヨルが亡くなると遺産相続人となる。画廊として「ナイーブ派」と呼ばれる画家たち(税関吏ルソー、カミーユ・ボンボワ、アンドレ・ボーシャン、ルイ・ヴィヴァン、セラフィーヌ・ド・サンリス)のコレクターとなり、1983

年「ダイナ・ヴィエルニー財団」を設立し、1995年現在のマイヨル美術館を開くのである。

同じくチュイルリー公園内置かれた「川」は、1964年ダイナ・ヴィエルニーと当時の文化大臣アンドレ・マルローによって屋外設置用に鉛像として鑄造された。

絵画と異なり彫刻には圧倒的な存在感がある。滑らかな大きな石の重量、純化された優しさと強さを秘めたマイヨルの作品に向かっ



ていると心の空洞が埋まるような気持ちになる。(古賀順子記)

日本で見れるマイヨール代表作《ヴィーナス》の構想段階

群馬県立近代美術館所蔵

マイヨールは、簡素な造形による無名の女性のすがたによって、女性の永遠の魅力を追求した。マイヨールは1928年に代表作《ヴィーナス》を完成させる。本作品は18年にその最初の構想段階で制作された、顔、両腕を欠くトルソである。「ギリシャの彫刻は腕がない方が美しいことが多い」と述べたマイヨールは、トルソの美しさを讃え、トルソから制作を始めるのが常であった。

マイヨールにとって、ヴィーナスの名前が、永遠の女性を意味したように、かれには、個性的な顔や雄弁な手を欠くトルソこそ、普遍的で本質的な女性の美しさを表現できる最良のかたちであった。本作品は、すでに完成作品と同じように、右下に向かう首の動き、そして、左右それぞれ角度を違える両腕の傾きまで見事に表現され、力強い存在感に満ちている。なお、本作品と同じく、《ヴィーナス》の構想段階に制作された《ヴィーナスのトルソ》(1925)は国立西洋美術館に所蔵されている。

(群馬県立近代美術館ホームページより引用)

